

テーマ 「国語科における言語活動の在り方～メタ認知の理解のために～」

1. テーマ設定の理由

本年度の研究テーマ『言語活動の充実と道徳教育の推進』について、国語科で考えた最大のポイントは、従来から国語科の中に内包されてある『言語活動』や『道徳教育』との差別化である。

そのためにまず行ったのは、昨年のテーマある「豊かに生きるために」の元で我々が養おうとした力・・・『情報を送る力』、『情報を分析する力』、『思いを受け入れる力』について研究した上で感じた「生徒のコミュニケーション力の低下」を分析することである。結果、それらは次の三点に集約されると考えた。

一つに一般的な言葉に対する語彙力の低下。

一つに狭い言語の狭い範囲での当然の使用。

一つに自分の意見・感情を伝えるための手段や思考形態の単調化。

これら三つの現象を通じて見えてくるのは、昨今の生徒の多くは狭い言語活動の中で生きているということである。狭い言語活動世界の中では、自分たちの意思疎通が一応成立してしまう。そのため、意志疎通が実際にはうまくいっていないのに誤解をはらんだまま意思疎通が成立してしまうことや、意思疎通が成立しないときに自分の責任ではなく完全に他人の責任にしてしまう傾向などが強く見られる。また、複雑な感情表現をさけるようになること、簡単な感情表現しか使わなくなるため、結果として自分自身の感情の整理ができない子も増えているのではないかと考えられる。当然、感情を表現すべき会話も単純かつ単調なものとなる。このままでは、学力としての国語の力が向上しても、コミュニケーション力は向上しない。それでは、国語科の役割が意味をなさなくなってしまう。

それならば、その狭い言語活動を広げることができないのか。そのためには、どうすればいいのかについて考えることが、昨年度末から本年度の国語科の中で見いだした課題であった。

2. 本年度の研究について

その課題を解決するために次のような理論を仮定してみた。

第一に語彙力の低下は、授業の中で説明はするが簡易な言葉に置き換えないことで対応する。また、様々な文章を読ませることや感想や意見を書かせることで、多様な言葉に多様な視点から慣れ親しませて語彙力の低下に対応できると考えた。

第二に狭い言語の狭い範囲での使用は、一般的には通用しないことをしっかりと教えること。また、授業の中での会話《発表や意見交換など》トレーニングを通して対応する。

この二点は、対外的な思考活動（目に見える活動）である。これらの対応で対処できると考えた。問題は、第三点である。思考形態の単純化は、内的な思考活動（目に見えない活動）であることが多い故に「正解しても間違った思考形態をしていることに」気づけないことがあるのである。これは、大きな問題である。

そこで本人にも『自分自身の言動が他者からどう思われているのかを考えて言動を考えることの重要性』に気づき身につけるため、つまり『メタ認知』という思考形態をある手順として教えることを考えた。もちろん、手順を決めてしまい思考そのものがその手順しかできないようになってしまえば、柔軟な思考展開は難しくなってしまう。そのためには、「質問の時の言葉」「意見を言うときの言葉」などを単純に決めつけてしまうのではなく、あくまで『メタ認知』に至るための一つの手順としては踏むが、話し合いの場面やその手順から得た力を活用する場面に応じた適切な言語活動を考えさせ選ばせていくのである。そうすることで、メタ認知に至るための一つの思考方法としてある手順を身につけつつ、活用する場面を設定することで、単調化を防ぐことができると考えた。

具体的な授業の観点としては「記録・要約・説明・論述・討論」を土台として、『他者への発信スタイルを常識化』（表現方法の習得）し、『言語活動を評価しやすい発問』（互いの評価方法の習得）を行うこ

とで『協同学習に関連して、小グループでの話し合いの場の設定』（多様な方法論の習得）を容易くし、互いの能力向上のために『言語活動語の振り返り【自己評価】の導入』（一つ的手段にだけ頼った単調化の防止）を目指すことと考えた。

簡単に言ってしまうと、あるレベルのマニュアルを作成して実施させることである。マニュアルという言葉は、悪い言葉にとらえられる向きもある。しかし、『すること』と『すると身につけられること』をはっきりとさせるという方法で考えれば、国語科で考える言語活動【メタ認知】の習得を進めていく上で、マニュアルは非常に重大な位置を占めていると考えた。

以上の考えで本年度は、知識・感情伝達の方法を身につける上で【メタ認知】が重要な位置を占める授業を展開していくこととした。

3. 成果と課題

『言語活動』を国語科にどう取り入れるべきか。国語科で話し合った際にもっとも壁となったのが、他教科との差別化であった。社会科での言語活動とどうちがうのか。理科の言語活動とどう違うのか・・・各教科の思考活動や言語活動の基礎的な技能《スキルの学習》とどう違うのか・・・たどり着いた一つの結論が、『メタ認知』という視点であった。

自分自身を教材とするとでも言った方がよいだろう。

教材や現象、或いは人との関係などから私たちの心にわく様々な意見や感情・考えなどを誰かに伝えるときに、その伝え方や相手に与える影響などを自分自身で意識させることに重点を置いた授業をたてようとしたことは、生徒だけでなく我々教師にとってもレベルの高い世界をもたらしてくれた。

単純に教材を読み解き、自分の考えや意見を発表し、作品世界に入り込む・・・そう言った従来の国語学習から、さらに一步踏み込めた学習を計画することができるような意識を持てたことは、大きな成果である。

また、生徒自身も他者との関連を強く意識したことで、自分自身の意見を作り出すときにより普遍的でわかりやすい意見や考えを出せるようになったことは大きな成果である。

だが、その世界は取り組みば取り組むほどに課題が出てくる世界であった。

国語科の反話し合いの中で、次の二つの課題がだされた。

『メタ認知』という難解な概念を生徒にどのように伝えるかということと、『メタ認知』を学習に取り入れるために必ず言語活動の中に『メタ認知』をいれた活動を誰もがができるようなマニュアル化した方法を取り入れることの難しさである。

この二つをどう解決していくかが、今後の最大の課題である。

実践1 1年生

授業者 上原 一 弥

① 題材 協力して小説を作ろう。

② 題材について

昨年の研究授業では、【私的な言葉】が公的な場で使われたときに及ぼす互いの意志疎通への影響の大きさについて扱った。

結果として、影響については生徒に伝えることはできたと感じた。しかし、ではどのようにしていけば、その影響を脱却できるのかどうかについて考えさせることはできなかった。

本年度の生徒もやはり【私的な言葉】の持つ危険性を認識してはいないようだ。

今回は、『言語活動』が一つの大きなテーマとなっている。そのこととの関連性を考えて、昨年までのつながりを考えながら、自分自身の意見や考えを他者に理解してもらうことを前提に書き出すことをさせたいと考えた。問題は、高い関心や意欲がなければこれはできないということである。そこで、高い関心や意欲を持ちながら取り組んでもらえる方法を次のように考えた。

- ・「数種類のキャラクターのイラスト」をランダムに選ばせ、キャラクターの性格や世界観を設定させる。
- ・そのキャラクターを使って、こちらの準備した物語にそって行動させる。
- ・行動はできるだけ詳しく書かせる。
- ・心理描写も詳しく書く。高い目標として、感情表現そのものを使わずに、表情や行動描写で表す。

この方法で小説作りをさせると同時に、全員で協力しなければ完成しないことを強く意識させ、班（4人）で意見交換をすることで、他者の理解を考えながら自分の表現を推敲させる。また、何度も推敲することで全体の構成を考えさせることもできる。そして、これらの活動を通して、自分勝手な狭い言語活動をより広いものへと広げることができる力【書くこと(1)-ア・(1)-ウ】を育てられると考えた。また、他者へのアドバイスも重要なポイントであるので、【読むこと(1)-オ】も育っていくと考えられる。

③ 学習の目標と評価規準

学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が持ったイメージを言葉として表現したことが、全員に共有されるような表現を工夫する。 ・推敲を繰り返すことで、自分の伝えたいことをより具体的に表現できるように工夫を増していく。
評価規準	
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉が他者に理解されているのかを積極的に考えようとしている。 ・他者と理解されていない言葉を、理解できる表現へと導こうとしている。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを伝えるために、他者に理解できる適切な言葉を身近な生活や学習から選ぶ。(1)-ア ・自分の考えや気持ちを的確に表現するために適切な言葉や表現を選ぶ。(1)-ウ
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ・文章から感じられる考えや感じ方を理解し、自分の考え方や感じ方を広くする。(1)-オ

④ 学習計画（単元構成表） 全6時間（本時 2 / 6）

学習過程	学習の中心	言語活動の視点	観 点
人物描写のトレーニングを行う。 (2時間)	・自分で作ってみて、小説作りの楽しさを感じさせる。	・数種類の実例やトレーニングを行うことで、人物描写のトレーニング技能・知識を身につける。	書くこと (1)-ア 関心・意欲
骨組みとなる物語に沿って、人物がどう行動し、何故行動したのかを書く。 (2時間)	・自分が考えたキャラクターの性格の行動を理解してもらえるように表現させる。 ・他者に理解できるような表現を工夫する。	・自分が想像したキャラクターの行動の心理をつかんでいる。 ・他者に行動の心理を伝えられるような工夫をする。 ・他者の評価を受けて、よりわかりやすい表現の工夫をする。	書くこと (1)-ア (1)-ウ 読むこと (1)-オ
完成した作品を発表する。 (2時間)	・互いの作品を評価する。	・人物の描写と展開に応じた心理的な理由付けを評価し合う。 ・自分の作品と人物評価や心理的な理由付けを自己評価する。	読むこと (1)-オ

⑤ 本時の目標

- ・人物描写トレーニングを通して、自分の感じたことを他者に伝える力を養う。
- ・他者と共有できる言葉や表現を工夫する。

⑥ 本時の展開

	学習活動	教師の指導	備 考
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字テストを行う。 ・前時までを振り返る。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相互採点をきっちりと行わせる。 ・本時の目標は漢字テスト中に板書する。 ・前時の人物描写トレーニングを振り替えさせる。 ・前時のトレーニングを喚起させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかったことや難しかったこと、うまくいったことを発表させる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・再度、人物設定シートを配布する。 ・人物設定を行う。 ・物語の骨子を配布する。 ・班内で意見交換させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・より詳しく、より具体的な描写を心がけさせる。 ・人物設定シートに従わせる。 ・物語に沿って、人物を行動させる。 ・互いの小説の良い点を中心に交換させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・細かく「何故?」「どうして?」と考えさせる。 ・行動の元となる心理描写を考えさせる。 ・心理描写は、具体的な行動(エピソード)で表現させる。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価を行う。 ・次回の授業から、本格的な小説作りに入ることを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の評価は厳しい方向でさせる。 ・今日の授業の楽しさを再確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の目指したことと実際の結果の差を認識させる。

⑦ 結果と考察

今回の授業で一番大きなポイントとして考えた『自分自身の意見や考えを他者に理解してもらうことを前提に書き出すこと』について考察していきたいと思う。

特にこちらが意図した視点で、成果が上がったものとしては、『心理描写も詳しく書く。高い目標として、感情表現そのものを使わずに、表情や行動描写で表す』ことである。

題材の項目でも簡単に書いたが、【私的な言葉】は自分自身の中では絶対的な存在感を持っている事が多い。「この気持ちを表現するには、こう言えばいい」や「この気持ちを表現するには、これでいい」などである。だが、それでは相手に伝わらないこともあるし、薄っぺらな気持ちしか伝わらないことも多い。

一つの結果として、幸いなことに「伝わらないことがある」という話がすんなりと彼らに伝わったことがあげられる。『気持ち』や『感情』を『感情を表す形容詞・形容動詞・動詞』などをできるだけ使わずに表すという作業は、こちらが考えていた以上にスムーズに取り組んでいた。ただ、一般的に通じるものもあれば、工夫はしているものの癖の強いものもあった。特に癖の強い表現をする生徒には、伝統的な慣用句を知らない生徒と様々な小説を読み込んでいる生徒がいた。

そのあたりの表現の交流が班内ではうまく進んでいたが、クラスで発表する時には癖の強いものよりも伝統的な慣用句を使ったような表現が好まれていた。

単純に伝統的な表現の方がわかりやすいととるのか、発表時にその方が周囲に対して説明しやすいからか…そこに関わる指導がこのときは抜け落ちていたので、以降の授業では幾つかある選択肢の中から何故その意見を自分が選んだのかを明記させるようにしてきた。

しかし、一年生ということもあってか明確に自分自身が意見を選んだ理由を書ききれない生徒がまだまだ多い。(意見を選んだ理由を考えようとする癖はつきつつあるが…)

また、どんな活動も全員で協力しなければ完成しないこと強く意識させて、班で協同学習させたことは互いの思考活動によい影響を与えてきている。ただし、まだ意識した活動には至っていない。

今後の課題としては、よりクラスや学年・学校など集団や場を生徒が意識した思考活動をいかに我々教師が意図的に授業に取り入れていけるかであると考えた。

人物設定シート

この人物についていろんな事を設定しよう。

名前

年齢

生年月日

星座

趣味

好きな食べ物

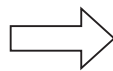
好きな色

好きな音楽

好きな飲み物

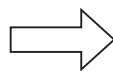
出身地（国）

性 格



そのエピソード

性 格



そのエピソード

性 格



そのエピソード

※仕上げてみて違和感のある情報は、どんどん修正していこう！！

人物設定シートを使って、次の行動をその人物が行ったら、どんな気持ちだったのかを書いてみよう。
ただし、「楽しい」とか「悲しい」とか「うれしい」とかは使わずに・・・ちょっとした動作で表そう。

行動・・・道を歩いている。
目の前で人がこける。
助ける。
去っていく。

さあ、場所はどこかな？時間帯は？何をしに歩いているのかな？
自分が作った人物なら、どんな気持ちで歩いているだろう？
人がこけたとき、どんなことを思い、どうしようと思うだろう。
助けるにしても、どんな気持ちで、どう助けるだろう？
去っていくときは、どんな風に去っていくだろう。
上にも書いたけど、感情表現を動作や所作で表そう！！レッツチャレンジ～！

※私の作品！

私の作品への他の人の批評（とにかくほめる！ほめた文章の後ろに名前を忘れない！）

私の作品への私の批評（今度は厳しく！一つほめて、一つ反省する。）

- ① 題 材 古典を楽しもう「高名の木登り」「ある人、弓を射ることを習ふに」(『徒然草』より)
② 題材について

4月当初、詩や短歌の語句や表現からその世界を想像し、鑑賞文を書いた。書かれている言葉や表現に着目し、それを根拠に自分の感じたことを表現できる学習者もいる。しかし、その一方で、どの語句や表現に着目して読めばいいのかわからない、語句の表面的な意味だけを並べることに終始し、そこからどんなことを感じたか書くことができないなどの課題を持っている学習者もいる。そこで、本単元の題材「徒然草」では、筆者の主張する教訓について、解釈の違いが見られる資料を用意し、そのどちらが教訓の解釈として妥当かを本文の言葉から考えさせる。そのことを通して、学習者の考える解釈の理由から、文章を解釈する際の着目点をいくつか明確にすることができる。また、本文の言葉に加え、解釈は読み手の経験や価値観によって左右されるものであるということを知り、古文の解釈における読み手の思考のプロセスを学習する。このような古文の読み方を学習することで、古人のものの見方や考え方を現代に生きる自分たちと関連付けて、古典を味わう力を養うことができるのではないだろうか。

題材「徒然草」は、吉田兼好の書いた鎌倉時代の随筆であるが、内容がバラエティに富んでいる。序段と二百四十三段から構成されていて、その内容は①「つれづれ」についての段、②無常に関する段、③趣味的なことに関する段、④仏道・出家・遁世に関する段、⑤人間の観察に関する段、⑥日常の教訓に関する段、⑦有職故実の知識や尊さ・考証に関する段、⑧逸話や噂に関する段、⑨思い出や自慢話に関する段、に分類することができる。その全体に兼好の考え方、人生観・世界観が貫かれており、それらは現代に通用するものも多く、「徒然草」を現代の生きる知恵として様々な書籍が出版されている。学習者にとっても「徒然草」は身近な古文として読むことができるであろう。今回の授業では、中学生にとってもより身近であろう日常の教訓に関する段を取り上げる。

「高名の木登り」(百九段)は二段落から構成され、第一段落に書かれた事実を受けた筆者の感想や例が第二段落で語られる構成となっている。文章の大部分は、「安心に潜む危険」ということを表す内容になっているのであるが、第二段落の始めの一文にだけ「人は身分で決まるものではない」といった記述が出てくる。そのどちらに着目するかで、教訓の解釈は大きく二つに分かれる。また、同じ教訓の解釈であっても、その解釈が妥当だとする理由も、書かれている内容、文章構成、表現の工夫などさまざまなものが学習者の中から出ると考えられる。

「ある人、弓を射ることを習ふに」(九十二段)は、二段落から構成され、第一段落に書かれた事実に対する筆者の考えが第二段落で語られる構成になっている。また、筆者の感想や考えをあらわす部分に、反語表現が使われている。「高名の木登り」と同様に、解釈の理由とするところにより、教訓の解釈に相違が出てくる。実際に出版されている書籍の表題を比べても「決心即実行の難しさ」「今をがんばる!」「集中力を高める」と、相違がみられる。九十二段では「高名の木登り」での学習を生かし、学習者自身で教訓を読み取らせるとともに、その教訓を導き出した理由を明らかにさせる。

この二つの段における学習者自身の解釈とその解釈を導き出した理由とを、教室内で相互に交流させながら、学習内容の深化を図る。

資料

- ・『日本古典文学大系 方丈記 徒然草』 岩波書店
- ・『徒然草』 角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス
- ・『使える!徒然草』 PHP新書
- ・『徒然草がおもしろいほどわかる本』 中経出版
- ・『知識ゼロからの徒然草入門』 幻冬舎

③ 学習の目標と評価規準

学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「徒然草」を原文と複数の資料を関連づけて読むことができる。 ・筆者の思いを想像し、ものの見方や考え方をとらえるとともに、自分自身の知識や経験と関連づけて自分の考えをもつことができる。 ・自分の解釈がよく伝わるように説明の仕方や具体例を工夫して書くことができる。
評価規準	
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像しようとする。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えが効果的に伝わるように、説明や具体例を工夫して書く。
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成や展開、表現の仕方について、理由を明確にして自分の考えをまとめること。 ・文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連づけて自分の考えをもつ。

④ 学習計画 全7時間 (◎は本時で4時間目)

学習内容	学習の中心	言語活動の視点	観点
「高名の木登り」(百九段)の教訓における解釈の違いから、古文の解釈の注意点を考える。(4時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・『徒然草』の文学史における意義を知る。 ・原文を音読し、現代語訳と対照する。 ・百九段についてのいくつかの解釈を読み、その妥当性について考える。 ・他者の理由と自分の理由を比較し、修正する。 ◎古典の解釈のモデル(思考のプロセスを考える。)	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す。 ・原文に書かれている内容を整理する。 ・現代語訳や違った解釈の資料を読むことで、内容理解を深める。 ・解釈の妥当性について、本文の言葉や自分の体験から理由を説明する。 ・他者の意見から自分の考えを深める。 ・他の人の解釈の理由から、古文の解釈のモデル(思考のプロセス)を理解する。 	読むこと (1)－ウエ 書くこと (1)－ウ
「ある人、弓を射ることを習ふに」を読んで、教訓の解釈を理由とともに考える。(3時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・九十二段を読み、現代語訳と対照させる。 ・九十二段の教訓の解釈とその理由を考える。 ・他者の解釈を聞き、それらの解釈と自分の解釈を含めて、その妥当性について考え、解釈を修正する。 ・「高名の木登り」の解釈の理由との質の変化を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史的仮名遣いを直し、内容を整理する。 ・本文から読み取れる教訓を考え、本文の言葉と分の体験から理由を説明する。 ・他者の意見から自分の考えを深める。 ・教訓の解釈において、どのような着目点があったか確認する。 ・自分の書いた解釈の理由が「高名の木登り」の場合と比べ、どのように変化したか考察する。 	読むこと (1)－ウエ 書くこと (1)－ウ

⑤ 本時の目標

- ・「高名の木登り」についての友達の解釈にふれ、古文の解釈におけるモデル（思考のプロセス）を理解する。

⑥ 本時の展開

	学習活動	教師の指導	備考
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・「高名の木登り」を音読する。 ・前時までを振り返る。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・形をかえながら、何度も大きな声で音読させる。 ・前時に書いた根拠のことを思い出させる。 ・古文の解釈がどう違うのか全員で明らかにしていくことを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア読み、一斉読みなど ・目標の掲示
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・他の人の教訓の解釈の理由をもとに、解釈の着目点を考え、整理する。 ・古文を読むときにはどのような読み方をすればよいか確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文と資料を見ながら聞くよう指示する。 ・理由の挙げ方についての資料をいくつか提示し、それぞれの生徒に解釈の理由について質問しながら、解釈の型を明らかにしていく。 ・質問された生徒が答えられない場合は、他の生徒に答えさせ、発言をつないでいく。 ・解釈の理由の型を振り返り、本文に書かれていることはもちろん、読み手の体験や価値観が解釈に大きく作用することを説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料として扱う生徒の書いたワークシート
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の振り返りを書く。 ・次時に、百九段を解釈することを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習して気付いたことや感じたことを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りカード

⑦結果と考察

今回の実践では、正しい解釈ではなく、解釈のモデル（読む思考のプロセス）を学習者に最初に提示し、そのモデルに沿って読みを振り返らせた。これは、学習者に正しい読みを示すということではなく、学習者を主体的に教材文に関わらせ、ことばの学びを高めようというねらいからである。読みの学習を行う時、学習者は絶対的な正解としての読みがあると考え、そのことが豊かで柔軟なことばの学びを困難にさせる。古文となればなおさら、現代語訳を読むだけの理解にとどまってしまう。そこで、まず「高名の木登り」について異なる解釈をしたものを資料として提示し、その解釈の妥当性について、古文と学習者自身の体験などをもとに考えさせた。学習者は異なる解釈それぞれと古文とを読み比べながら、「この文にこのようなことばが書かれているから。」「この部分がまとめとして書かれているから、きっと一番大事なことで、教訓の解釈となるんだと思う。」というように、本文中のことばにこだわって読みを進めていた。また、「僕も簡単なところで気を抜いて、失敗してしまったことがあるから」など、自分の体験などをつけ加え説明していた。つまり、解釈のモデルに沿って古文を読み、その妥当性について、自分のことばで言語化しているのである。このように、異なる解釈の妥当性について、古文中のことばにこだわり、自分自身の体験などを読み投入することにより、古文であっても現代人である学習者の主体的判断に基づく読みの世界を豊かに表象できるという自覚を促すことができた。また、「高名の木登り」での学習を生かして行った「ある人、弓射ることを習ふに」においても、ことばにこだわり、自らの読みから解釈をしようとする姿勢が見られた。

しかしながら、学習者の中には、教材文のことばに十分こだわることができなかつたり、教材文に関連する体験や知識を想起しつつ、リアリティを持って教材文を読み進めることができなかつた学習者もいた。解釈のモデルは理解していたが、今回の解釈のモデルは思考の筋道を抽象化したただけのものであったため、教材文のことばにどうこだわればいいのか、どんな体験や知識を想起すればいいのかなど、具体的な方向性が見いだせず、戸惑ったものと考えられる。学習後の振り返りにも、「体験を思い出そうとしたが、このエピソードに該当するようなものを見つけることができなかつた。」「どのような体験を描けばいいのか分からなかつた。」というような学習者の声があった。このことから、そのような習熟度の学習者にもわかりやすい、教材文の内容にも踏み込んだ具体的な解釈のモデルを編み出す必要がある。



ところで、今回の実践では、読みの過程に学習者同士の交流学习を組織した。交流学习の成果として次のような事例がある。ある学習者は、班員の読みに触れ教材文を再度読み返すことにより、自らの読みの偏りに気づいた。交流活動の様子を見ていると、「ああ、確かにそんなことば書いてあるわ。気付かなかつた。」「そっちの意見もわかるけど、ここにこう書いてあるやんか。だから、私の解釈の方が説得力あると思うんだけど。」というようなやり取りも見られた。交流活動を通して、他者の読みと自分の読みとの異なりに気づき、その異なりの原因を教材文に立ち返ることによって、自分の読めていなかった部分を発見するというように、ことばの学びを高めることができたのである。このように、交流学习をすることには、互いの差異とその原因を探ることによって、そのことをきっかけに教材文のことばにこだわって読みを進めるといことばの学びを活性化させるという効果がある。

しかし、この交流活動には課題も残された。交流活動の影響を全く受けなかつた学習者や、交流活動により他の学習者の意見に安易に同調することで学びが停滞した学習者の事例がそれにあたる。交流活動の影響を全く受けなかつた要因は、交流グループ全員の読みが似通っていたために、互いの差異を追究することが難しかったことにある。このような場合には、読みそのものにとどまるのではなく、読みの根拠や理由を吟味し直すような、交流活動が停滞しないための教師の働きかけが必要になる。また、教材文に立ち返ることなく、他の学習者に同調してしまいがちな学習者に対しては、あくまでも教材文にこだわって読むことがねらいであることを意識させて、交流活動に臨むことができるような環境作りが必要である。

① 題材 附中をPRしよう ～キャッチコピーで言葉を磨くリーフレット作り～

② 題材について

高度情報社会の中で、子どもたちはさまざまなメディアに囲まれて生活している。メディアは私たちにもを分かりやすく伝え、そして多大な影響力を持つ。様々なメディアから受けた情報を子どもたちはそのまま受容してしまうことが多い。そして、「何となくおもしろい」「何となくいい」のように、ものごとを感覚で捉えがちであるように思う。そこで、直接メディアをつくるという体験を通して、メディアと積極的に関わっていきける力を身につけさせたいと考える。

今回は、現代表現の最前線、表現の宝庫と言われているスローガンやキャッチコピーを、新聞の広告という活字メディアから学ぶことでそのあり方を学び、本校のアピール広告を作成することとした。

新聞は広い年齢層を視野につくられているので、さまざまな広告が載せられており、いろいろな種類の広告を簡単に収集することができる。また、新聞広告でのキャッチコピーはテレビCMとは違い、活字で示されているので1つ1つの言葉に注目しやすく、グループで意見を交換し、他者の理解を考えながらコピーの特徴を探っていくのに適切であると考えた。

広告キャッチコピーをつくるコピーライター谷山雅計氏は著書の中で「発想体質をつくるためのヒント」を示している。その中で、コピーを書く作業を3つのステップで捉えている。

- ① 散らかす → ② 選ぶ → ③ 磨く である。

この3つの中で一番大事にしたいのが ①散らかす である。子どもたちは自分との関わりの中で考えるため、実際に考えてみるとすぐにペンが止まってしまう子も少なくない。そこで、関連性（受け手になる立場のもの）を増やして考えさせたい。広告メディアはある対象を、送り手が多くの人の心を惹きつけられるようつくりられている。しかし、そこには必ず受け手の存在がある。その受け手の立場からとらえることで、情報は多角的になる。つまり、さまざまな受け手の立場から対象のキャッチコピーを考えることでアイデアが広がり、より多くのキャッチコピーを書くことができると考える。

このことをふまえ、初めに子どもたちに新聞の広告を収集し、分類させていくことでキャッチコピー・ボディコピーの表現の特徴やおもしろさを学ぶ。その後、キャッチコピーを発想するとともに、レトリックや関係性にも着目しながらキャッチコピー・ボディコピーを制作することに重点を置いて進めた。

③ 学習目標と評価規準

学習目標 評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな発想の仕方を身につけ、論理的に言葉を組み立てる。 ・推敲を繰り返し、自分が伝えたいことを適切な言葉で表現できるように工夫する。
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・広告から伝わるイメージを言葉で表現しようとしている。 ・自分が伝えたいことを適切な言葉で表現しようとしている。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の形態、論理の展開を工夫し、説得力のある文章を書く。 ・つくりあげた広告を互いに読み合い、表現の仕方について評価して自分の表現に役立てる。
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ・語句の配列や選択など、文章中の語句の効果的な表現の仕方に注意して読む。 ・書かれた文章から書き手の意図を考え、論理的に評価する。

④ 学習計画（単元構成表）

学習内容	学習の中心	観点
新聞広告について考える (第1～2時)	新聞や広告にある宣伝コピー、ボディコピー、画像の読み取りと意見交換。新聞の書き方の特徴を考える。 ・効果的なコピーについて考える。	(C)－ア
キャッチコピー・ボディコピーをつくる (第3～4時) 本時は3時	キャッチコピーをつくる。 ①集める → できるだけたくさんコピーを考える。 ②選択する → 受け手がどう感じるかを考える。 ③磨く → リズムやレトリックなどを通して話題の広がり方を考える。 ボディコピー（キャッチコピーを補足・解説する文）をつくる。 ・何を伝えるか吟味する。 ・対象となるものへの思考を深めることに力点をおく。	(B)－イ (言)－イ
写真や挿絵を入れ、広告を仕上げる (第5時)	・カメラのアンクル、ポジション、色彩などで写真に、どんな作者の意図が表されているのかを考える。 ・デジカメを使って校内の写真をいれたりや挿絵を画いたりして、レイアウトする。	(B)－イ (言)－イ
批評会を行う (第6時)	仕上げた広告のプレゼンテーションを行う。 ・何を意図してつくったか、そのための工夫はどんなところかなどを発表する。	(C)－ウ

⑤ 本時の目標

- ・関連性を持たせながら、たくさんのキャッチコピーを考える。
- ・他者と意見を交換し合い、受け手の感じ方を理解する。

⑥ 本時の展開

	学習活動	教師の指導	備考
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時を振り返る。 ・ 本時の目標を確認する。 	<p>前時の学習から考えたキャッチコピーの表現の特徴などを確認する。</p> <p>A I D M Aの法則を考えさせる</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>A = Attention (注意をひく) I = Interest (興味を持たせる) D = Desire (欲求を起こさせる) M = Memory (記憶させる) A = Action (行動をさせる)</p> </div> <p>頭文字を書き出し、それぞれ何を表しているか考えさせる。 この法則を念頭においてキャッチコピーを考えるように促す。</p>	
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 附属中学校のキャッチコピーをつくる。 ・ キャッチコピーを他者との関連性という点から考える。 ・ 再度チャレンジする。グループでキャッチコピーをつくる。 ・ グループのメンバーのキャッチコピーを受け手の立場から考え、整理する。 	<p>ペアで競争しながらすすめる</p> <p>関連性のヒントを与えて考えさせる。</p> <p>◎例をあげて説明する(炭酸飲料の場合) 子どもと○○、おじいちゃん○○、△△君と○○、宇宙人と○○、織田信長と○○…など</p> <p>◎教師がつくったキャッチコピーを例にあげて考えさせる。</p> <p>例・附中魂、ここにあり →附中と附中杯 ・歴史がある。夢がある。そこに学びがひらかれる →附中と和歌山</p> <p>・附中と音楽会、附中と徳川吉宗、附中と自主の鐘などいろんな見方からイメージを膨らませるよう指導する。</p> <p>・立場や対象の違いによって様々な見え方があることに気づかせる。 ※キャッチコピーを考えるのが難しい生徒には思いつく言葉を書くよう指導する</p> <p>そのキャッチコピーがどんな気持ちを起こさせるか、考えさせる。</p> <p>・グループで考えたキャッチコピーを座標軸法で整理する。 縦軸にプラス・マイナス面／横軸に情報量</p>	<p>ワークシート①</p> <p>ペアで競い合わせ、興味づけをする。</p> <p>①集める</p> <p>辞書を用意する</p> <p>②選ぶ</p> <p>ワークシート②</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時のまとめ ・ 今日のふり返りを書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・ さらに効果的な表現を選びながら磨く段階に入ることを告げておく。 	

⑦ 結果と考察

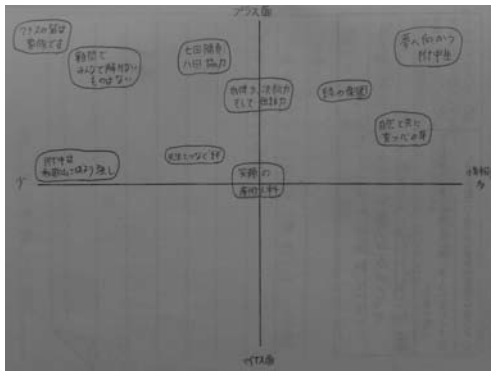
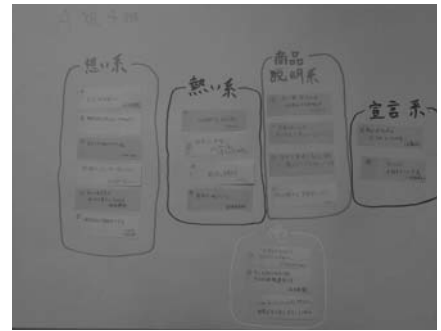
本時の授業に入る前に、自分たちで探したキャッチコピーを分類する作業を行った。自由に分類させたところ、言葉の修辞のしかたや広告媒体としての見方から分類している班もあったが、商品の分類をしている班も半数近くあった。プロの分類を提示することで、言葉の一つ一つを読み解くための思考のし方に気づかせることができたようだ。

しかし、いざ自らキャッチコピーを作成するとなると、発想力に乏しい生徒もおり、グループで差があ

り、個人個人へのアドバイスが必要な場面があった。魅力的なキャッチコピーをつくりあげている生徒も何人も見られたので、授業の途中で班ごとに発表させ、意見交流の時間を設けることが大切である。

また、座標軸上に分類する場面でも、班から出されたキャッチコピーをクラスで意見を出しながら分類してみれば、全体で共有でき、学びもひろがったであろうと反省するところである。

その後のリーフレット作りは楽しみながら取り組み、ボディコピー作りも、物語風・問いかけ型・故事成語を活かしたもの・風景描写に力を入れたものなど、独自の表現への意欲が見られた。



← X軸を情報量、Y軸をプラ
ス面・マイナスイメージとする

言葉を分類し整理することで、自分やグループで生み出した言葉一つ一つを何度もふり返る作業を行った。その作業をグラフやグループ活動など多様な形で『メタ認知』していく中で、言語がもつイメージや意味を熟考することができた。今後も授業の形態を工夫しながらさまざまなメタ認知を促す言語活動を設定していくことで、自ら言葉を生み出し、さらに磨きかけられるような思考活動を行っていきたい。

【参考文献】堀内伸浩 『書く』マーケティング』明日香出版社

金子 守 『総合的学習に生きる広告の読み方・生かし方』東洋館出版社

谷山雅計 『広告コピーってこう書くんだ！読本』株式会社宣伝会議

ジョン・ケープルズ 『ザ・コピーライティングー心の琴線にふれる言葉の法則』

ダイヤモンド社

鈴木康之 『名作コピーに学ぶ 読ませる文章の書き方』日本経済新聞出版社

生徒作品

